

主 題：造り主であることば

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章3－5節

今朝も続けて皆さんと見ていくのは、ヨハネの福音書1章のみことばです。きょうは特に3－5節を中心に考えたいと思います。ただその前に、前回までの流れを振り返るためにもう一度1節からお読みしますので、それぞれよく神様のことばに耳を傾けてください。

ヨハネ1－5節

「1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。 2 この方は、初めに神とともにおられた。 3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。 4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。 5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」

さて、きょうの内容に入って行く前に、いま一度思い返してみてください。先週私たちは、“ことば”であるイエス・キリストに関して、特に三つの特徴を考えました。一つ目に見た特徴は、「ことばの永遠性」でした。ヨハネは1：1で最初に口にしていたのです。「初めに、ことばがあった。」と言ひ換えれば、“ことば”とは、すべての最初からあり続けていた存在でした。私たちが過去を振り返ってみたときに、どこまでさかのぼろうと、この方はある時は存在して、ある時は存在しない、などということはありませんでした。“ことば”であるイエス・キリストは、世界が誕生するよりもはるか前からどんな時も変わらずにあり続けたお方でした。そんな永遠の神様——それが“ことば”だったので

す。そして次に見た二つ目の特徴は、「ことばの偉大さ」でした。ここでヨハネは、神の御子がどんなに偉大なお方なのかということ表現するために、“ことば”というものを用いていました。「初めに、ことばがあった。」この“ことば”、これは私たちにはあまり馴染みがないかもしれませんが。でもこの当時、この福音書の読者だったユダヤ人とギリシア人にとっては、この“ことば”は、さまざまな意味を持っているものでした。例えば読者であるユダヤ人にとっては、この“ことば”という表現を耳にすれば彼らは真っ先に、創造や救いにおける神様の圧倒的な力というもの、神様ご自身の啓示、を思い浮かべるものだったのです。では読者であるギリシア人がこの“ことば”という表現を耳にすれば彼らは、あらゆる物事の裏側に存在している力や法則のこと、を思い浮かべるものでした。ですからこの当時、人々はいろんな考えや思いを“ことば”というものに対して持っていたのです。そしてそのようにいろんな考えを持っている人たちに対して、ヨハネはまず初めに明らかにしていました。「皆さん、皆さんはいろんな考えを持っているでしょう。でもほかのだれでもない御子イエス・キリストこそ、まことの“ことば”なのです。この方こそ、初めからおられた“ロゴス”なのです。」と。「初めに、ことばがあった。」ユダヤ人にしてもギリシア人にしてもだれであれ、彼らが求めていたその“ことば”という存在こそ、偉大なイエス・キリストだったので

す。そして三つ目に見た特徴は、「ことばの神性」でした。“ことば”は神なのだ、ということです。私たちが絶対に勘違いしてはいけないこと、それは、“ことば”であるイエス・キリストは、神様のようなお方ではないということです。この方は父なる神様に比べて劣っているような存在でもなければ、神様の性質の一部だけを持っているような存在でもありませんでした。イエス様は神様のご性質のすべてを持っておられるお方だったので。父なる神様のうちに見られるものは、同じように子のうちにも見て取ることができました。“ことば”であるイエス様は、確かにまことの神様だったので。永遠性、偉大さ、そして神性。こうして先週、私たちは大切な三つの特徴を考えました。この三つの特徴を通し

て、この地上に来られたその“ことば”というお方がいったいどのような存在だったのかを、私たちは考えたのです。

でも、もちろんこれがすべてではありませんでした。今回私たちが見ていく続きの3-5節でも、ヨハネは同じように主の姿というものを描いていました。特に三つ、私たちは“ことば”であるイエス様の姿を3節のうちに見て取ることができます。いったいイエス様はどんなお方なのか、その姿を順番にきょうも一つずつ学んでみましょう。そして皆さんその姿を学びながら、ぜひ続けて自分自身に問い続けてみてください。いったいイエス・キリストとはだれなのだろう？と。そして、このお方を私は自分のこととして個人的に知っているのだろうか？と。また同じ質問でしょうか？と。思っている人がいるかもしれません。でも皆さん、私たちが聖書を見る時に、聖書の中にこの質問が何度も何度も繰り返されているのを私たちは実際に見て取るのです。いろいろな人たちが同じ質問を繰り返していました。例えば律法学者はある時こんなことを言っていました。「神をけがすことを言うこの人は、いったい何者だ。」

(ルカ5：21)と。律法学者だけがそれを言っていたわけではありません。あのヘロデ王様もこんなふうに言いました。「ヨハネなら、私が首をはねたのだ。そうしたことがうわさされているこの人は、いったいだれなのだろう。」(ルカ9：9)律法学者やヘロデたちだけではありません。弟子たちも同じでした。皆さんもよくご存じでしょう。イエス様が嵐を静められたその時、その場面において弟子たちはこんなことばを言うのです。「風や潮までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」(マルコ4：41) 私たちにとってイエス様がだれなのかを正しく知るといのは、とても大切なことです。皆さん、この質問に正しく答えることは、私たちにとっての永遠に関わるからです。イエス・キリストはいったいだれなのかという質問の答えを間違えるなら、その人が向かっていく先は、滅びでしかありません。だからこそ皆さん、私たちはただ知識として答えるのでありません。私たち自身のこととして考え続ける必要があるのです。いったいイエス・キリストとはだれなのだろう？と。そして、このお方を私は自分のこととして個人的に知っているのだろうか？と。では、その質問を念頭に置きながら、続けてイエス様の姿を考えてみましょう。

○ “ことば” であるイエス様の三つの姿

1. イエス様はすべての造り主 3節

まず一つ目に見て取れるイエス様の姿は、「イエス様はすべての造り主」だということです。3節はこんなふうに記されています。「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」冒頭からはっきり言われていました。「すべてのものは、この方によって造られた。」と。

▶ 「すべてのもの」

当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、「すべてのもの」とは、どういう意味でしょう？「すべてのもの」といのは、当然すべてでした。全部でした。私たちが「すべて」と口にする時、それは全体を指して、一部分を言うわけではありません。いくつかの例外が存在しているのでもありません。あるものは造られて、あるものは偶然誕生した、という話でもありません。「すべてのもの」とは、文字どおりすべてのものでした。今も私たちが周りを見渡してみる時、そこに目にする美しい自然界。そのすべてが、余すところなく一つ一つが、“ことば”である方によって、イエス様によって造られたのだというわけです。

また特に皆さんに注目してほしいのは、この3節で出てきた「造られた」ということばです。「すべてのものは、この方によって造られた。」と。先週私たちは1：1で、“ことば”であるイエス様について考えましたが、その時に私たちは、このイエス様が、初めからおられた方なのだ、と見ました。「初めに、ことばがあった。」と。イエス様は、ある時突然誕生したようなお方ではありませんでした。永遠の初めから変わらずに存在しておられたまことの神様なのだ、と、改めて見たのです。そして1、2節を何

回も読んでいた時に気づいた人もいるでしょう。ヨハネはその永遠性というものを強調するのに、この2節を通して「あった」ということばを何度も繰り返していました。何回出てきます？こう出てきますね。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」と。2節「この方は、初めに神とともにおられた。」と。ヨハネはこうして「あった」ということばを繰り返していました。言い換えれば、過去のどの段階においてもイエス様は常に存在していた、イエス様が存在していなかった場面は一度としてない、ということを強調していたのです。すべての初めから、“ことば”というものはあり続けていましたと。

▶「造られた」

そんな「あった」ということばと対比して、ヨハネは3節で「造られた」ということばを用いたのです。この「造られた」ということばには、「もともと存在していなかった何かが存在するようになる」「現れる」「造られる」といった意味が含まれています。言われていることは明白でした。要するにこれは、以前はいっさいなかったものが、あるようになるのだということです。かつては全く存在していなかったものが、ある時存在するようになったのだということです。そしてヨハネはこのことばを通して、ある大切な真理を教えてくれていました。被造物は、すべてのものは、かつては存在していませんでした。でも、永遠に存在しておられるその御子が、何もないところからすべてのものを造られたのだというわけです。イエス・キリストはすべてのものを造ったお方なのです。この方は、圧倒的な力を持った創造主なる神様でした。ヨハネはそのことを3節の前半部分でもはっきりと言いました。どうです？これを聞いて、ヨハネが言いたいポイントが十分わかりませんか？でも、ヨハネは万が一にも、ひとりでも誤解することが絶対にないように、前半でも十分なのにさらにことばを加えて強調したのです。ですから3節の後半でこう言うのです。「造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」と。「一つもない」と言われていました。これは皆さんどういう意味ですか？これもさっきと同じですよ。造られたものでイエス様によらずにできたものは、ただの一つとしてないのだということです。この世界に存在しているありとあらゆる被造物は、この方を通して造られたのだというわけです。すべてのものが偶然の産物ではなくて、造り主の作品でした。

そしてこの真理に関して、ほかのみことばも繰り返しはっきりと教えてくれているのです。例えばコロサイ1：16を見てみると、こんなふうに記されています。「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」またここだけではありません。ヘブル1：2-3にもこうありました。「：2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。：3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。…」聖書が一貫して教えていることは明らかでした。天にあるものでさえ、地にあるものでさえ、見えるものでさえ、見えないものでさえ、すべて御子によって造られたのだというわけです。

ただ残念ながら、この世はそうは教えていません。実際、このメッセージを準備している時に、ネットで「地球はどのように誕生したのか」と検索してみました。するとどんな検索結果が出てきたと思います？上から順番に出てくるものは全部、ビックバンという大爆発によってできましたとか、進化を繰り返して誕生した、という内容で埋め尽くされていたのです。例えば一つの研究機関もこんなふうにあります。「星でつくられた原子は、星の最後の超新星爆発によって、宇宙空間に飛び散りました。その原子がガスやちりとなって再び集まり、太陽が誕生して、その周囲にたくさんの微惑星ができました。微惑星が衝突・合体して46億年前に地球が誕生しました。」と。悲しいのは、この文章を書いているのは小学生ではないということです。悲しいのは、このような考え方というものが当たり前のように扱われてしまっているということです。この世界に存在している美しくて壮大な自然の姿を目の当た

りにしてなお、多くの人たちは、すごい！これらすべてのものは奇跡的に偶然誕生したのだ、と考えているのです。でも何度も言いますが、みことばは、そうは教えてはいません。すべてのものは単なる偶然によってできたものではありません。普段、私たちが周りの自然を見渡してみれば、そこに人の理解には到底及ばないすばらしいものを目の当たりにします。美しい夕焼けや満天の星空もそうです。高くそびえ立っている木々もそうですし、季節とともに移り変わっていく草木もそうです。広大な海も、陸に住む動物たちも、魚や鳥も同じです。また周りを見渡してみなくても、私たち自身を見るとき、私たちのからだの器官のひとつひとつにしてもそうです。挙げればキリはありません。でもそういったものを目の当たりにするときに、私たちにはことばはもうありません。ことばがなくともわかるのです。これらは偶然できたものではないと。こんなにも複雑で知恵や力に満ちているそのようなものが、何かしらの弾みで長い年月をかけて偶然できたとは考えられません。間違いなくこれを造った知恵と力にあふれた創造主がおられるのだと。そしてこの点に関して、まさにみことばは述べていました。ローマ書1：19－20 私たちもよく知っている箇所かもしれません。「:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」と。この世界の被造物は、最初から私たちに造り主の存在というものを教え続けてくれていました。偶然すべてができたものではありません。永遠の初めから存在しておられ、だれの助けも必要とせず、ただ測り知ることのできない力と知恵によってすべてをご自分で造った、そんな創造主がおられました。そして、それが皆さん、三位一体の神様——“ことば”である神の御子イエス・キリストだったのです。すべてのものはこの方によって造られました。

先日久しぶりに教会の友人と海遊館に行く機会がありました。皆さんが行けばわかりますが、海遊館ではいろんな魚を見ることができるのです。入ってすぐに気づきました。形も違う、大きさも違う、色もさまざまそんな魚がいろんな所にいたのです。ちなみに皆さん、この世界に何種類の魚が存在していると言われてるかご存じですか？約3万種類と言われていたりします。その3万種類の魚が、形も色も違うものがいろんなふう存在しているのです。そういったすべてのものを神様は造られました。月も星も海や山も、私も皆さんひとりひとりも同じです。私たちはみな、この方によって造られました。「造られたもので、この方によらずにできたものは一つとしてない」というわけです。

イエス様はそれほどまでに偉大な力を持っておられるお方でした。すべてのものをご自身の力のみで造ることのできた、そんな造り主でした。そしてその事実私たちが目を留めるとき、どうです？果たして私たちは、こんなイエス様の姿に日々心を留めているのでしょうか？私たちがイエス様の姿を覚える時、この地上に来てくださったその御子は、単なるひとりのすばらしい教師や預言者だったわけではありません。何の力も持っていない、か弱い存在だったのでもありません。かつて来られたこの方は、まことの神様でした。かつてこの世に来られたその方は、世界の創造主でした。文字どおりすべてのものを造られたその造り主が、造られた被造物である私たちを罪から救うために来てくださったのです。この文章、おかしいと思いませんか？すべてをお造りになったその造り主が、造られた被造物である私たちを罪から救うために来てくださったのです。私たちはそれに値するような存在だったのでしょうか？いいえ、私たちはみなよくわかっています。知識としてはよく知っています。周りの被造物が確かに神様の存在を明らかにしていたにもかかわらず、かつて私たちはその神様のことを心から認めようとしませんでした。この方を愛そうとも、この方に感謝をささげようともせず、むしろ罪に罪を重ね、神様にかたくなに逆らって生きていたのです。でも、そのような者たちのために、私たちに愛を示そうとしてくださったこの御子は、天から下り、私たちの身代わりとなって十字架にまでかかってくくださったのです。この世界のすべてを造ったお方が、あの十字架につけられたのです。いったいどれほど大きな犠牲を払ってくださったのでしょうか。あのスポルジョンもこんなことばを残していました。よく自分自身のこと

として考えてみてください。このように言われています。「十字架に架けられたお方は、万物の創造主でした。私たちのために幼子として来られたお方は、無限なる存在でした。一体どれほど、この方はご自分を低くされたことでしょうか！これほどまでにご自分を低くされた方は、どれほどの高みにおられたのでしょうか。」（チャールズ・スポルジョン）

私たちはこれからヨハネの福音書を進めていこうとしています。イエス様がどのようにして地上を歩まれていたのかということ、イエス様がどのようにして人々とともに歩んでいたのかということや、イエス様がいろんな人たちを癒されていたというような姿も、イエス様がいろんなしを行われたということも、イエス様が十字架にかかれたというそのような姿も、私たちは学んでいこうとしています。でも皆さん、その間、私たちは忘れてはいけません。どんなお方が人として来てくださったのかということ、決して忘れてはいけません。私たちはどんな時も造られた造り主であるお方が示してくださったその犠牲的な愛とあわれみを、私たちは忘れてはいけません。私たちはそれに感謝して歩いていこうとするわけです。

でも皆さん、私たちは、造り主であるその方が私たちに愛を示してくださった、ということを感じることができるだけではありません。それに加えてすばらしいのは、私たちはこの造り主である方のうちにいつも必要な助けを見出すことができる、ということです。かつて詩篇の著者はこんな告白をしていました。詩篇 121 : 1-2 にこう書いていました。「:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。:2 私の助けは、天地を造られた【主】から来る。」皆さん、私たちも同じ質問することができます。「私の助けは、どこから来るのだろうか。」と。どう答えます？皆さん、私たちの助けは造られたものから来るのでしょうか？それとも天地を造られた方から来るのでしょうか？感謝なのは、この世界をだれの手も借りず造ったその力あるイエス様に、私たちは助けを祈り求めながら歩いていくことができるということです。天地を創造されたそのお方に、すべてをゆだねながら歩いていくことができるということです。どうです？皆さん、そのイエス様の姿を覚える時、それは、すばらしいことだと思いませんか？それは、私たちが感謝をささげることができるものだと思いませんか？イエス様はこの世界のすべてを造った造り主でした。それが一つ目に見てとれる主の姿だったのです。

2. イエス様はいのち 4 a 節

次にヨハネに戻って、二つ目のイエス様の姿を考えてみましょう。それは、「イエス様はいのち」だということです。すべてを造られたその造り主であるお方は、いのちの源であるお方でもありました。4 節はこんなことばで始まっていました。「この方はいのちがあった。」と。あまりにも簡潔に書いてあるので、このすごさを見過ごしてしまうかもしれません。でもよく考えてみてください。ことばであるイエス様のうちには、「いのちがあった」わけです。気づきました？ここでヨハネは 1、2 節のところを使っていたあの同じ「あった」ということばを、またここで用いていました。「この方はいのちがあった」と言ったのです。ということは、「初めに、ことばがあった。」のと同じように、イエス様のうちには、初めから「いのちがあった」ということです。ある時点において、この方のうちにはいのちが芽生えたわけではありません。最初は持っていませんでしたが、そのいのちが突然この方のうちに生まれてきたのでもありません。永遠の初めから、いのちは、イエス様のうちに変わらずに存在し続けていました。この方のうちには最初からいのちがあり続けていたわけです。そしてね、皆さん、だからこそです。イエス様のうちにはいのちが常に存在していたからこそ、イエス様こそいのちの源であったからこそ、この方だけがほかのものにいのちを与えることができました。いのちを持っておられるお方だからこそ、いのちを与えることができました。ですよね？いのちを持っていなかったら、それをだれかにあげることはできません。この方はいのちが最初からあったからこそ、それを与えることができるお方でした。たとえこれが肉体的ないのちの話であろうと、霊的ないのちの話であろうと、だれかにいのちを与えることのできる存在というのは、まことの神様だけです。

振り返ってみてください。例えば創造の初め、神様はどのようにして人を造られていたのでしょうか？その場面が創世記2：7にこんなふうにかかれていました。「**神である【主】は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。**」さて、この場面、人アダムにできたこと何かありました？何もしませんでした。彼自身が必死になって人工呼吸や心臓マッサージをした結果、生きるものになったのではありません。彼がいのちというものを必死に求めた結果、生きるものとなったのでもありません。彼はただ神様によっていのちが与えられました。ただ神様が始めて、神様が成し遂げたみわざを通して人は初めて脈を打ち、呼吸をし、生きるものとなったのです。つまり、いのちを持っていないものは、いのちを与えることのできるお方に頼むしかありませんでした。いのちを持っていないものが、いのちあるものとなるためには、いのちを与えることのできるお方のそのみわざを通してでなければ、不可能だったのです。いのちがないもの、言い換えれば死んでいるものには、自分の生死に関してできたことは何一つとしてありませんでした。

そしてこの事実を覚えるときに、今私たちにいのちが与えられているというのは、ただ神様の恵みなのだと思いませんか？新しい朝を迎えて、まだ私たちの心臓が脈を打っているというこの事実は、皆さん、当然のことではありません。私たちがそのいのちを勝ち取ったのでもありません。私たちが健康だからこうやっていのちがあるのではありません。ひとえにそれは、いのちを与えてくださるお方があわれみ深いからこそ、私たちは今、息をしているだけなのです。

ちょっと考えてみましょう。果たして私たちはこの事実を日々正しく覚えているのでしょうか？この事実を喜んで、感謝をささげているのでしょうか？どうでしょう？ちょっと一緒に先週一週間を振り返ってみてください。私たちは朝起きて、きょうも主が自分にただ恵みによっていのちを与えてくださったのだと、感謝と賛美で始めた日はどれぐらいあったでしょう？その逆に、朝目覚めて、あーまた大変な一日が始まったと、つぶやいたり不満で始めた日はどれぐらいあったでしょう？正直に言うと、私も後者の方が多かったのではないかと思います。新しい一日を迎えることができたということ、何か当たり前のことのように私たちは感じて、神様に対する心からの感謝をもって始める時がいかに少ないかを、私もすごく考えさせられました。私たちは忘れてはいけません。私たちのいのちは、私たちの支配下にあるではありません。私たちのいのちは、ただ神様のうちにありました。神様だけがそれを与える権利を持っておられ、神様だけがそれを取り上げる権利を持っておられるのです。皆さん、これが創造主と被造物の関係でした。かつてヨブも次のように口にしました。ヨブ1：21にこう書いています。「そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかきこに帰ろう。**【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな。**」」主だけが与えることができ、主だけが取ることができました。そして私たちは、主が与えるその時に、それに対して文句を言うことも、それに対し意見を言うこともできません。主が取られる時、私たちはそのことに対して文句を言うことも、そのことに対して意見を言うこともできません。私たちは被造物です。私たちにその権利はありません。ですから、私たちがこうして肉体的ないのちのことを思うのであれば、感謝することができます。肉体的ないのちは神様からの恵みの賜物でした。私たちがそんないのちを神様から受けているのであれば、私たちはこの方に喜んで感謝をささげていくことができるのです。そのように感謝をささげていきたいと思いませんか？

でも同時に、もちろんこうして肉体的ないのちが与えられているのもすばらしいことですが、でも、これにはるかにまさるものがありました。いったい何か？それこそ、イエス様のうちにある霊的ないのち、永遠のいのちでした。肉体的ないのち以上に、私たちは永遠のいのちを主にあって持っているのです。改めて思い返してみてください。聖書は、主を知る以前、生まれながらの私たちの姿をはっきりと描いていました。例えばエペソ2：1-3にこう書いていました。「：1 **あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、**：2 **そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。**：3 **私たちもみな、かつては不**

従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」注目してほしいのは最初のことばです。私たちはみな「自分の罪過と罪との中に死んでいた者」だと言われていました。例外はいません。すべての者は霊的に死んでいました。死んでいた私たちには自分の生死に関してできたことは何ともありませんでした。私たちはただその罪のゆえ、神様から遠く離れ、「生まれながらに御怒りを受けるべき子ら」だったのです。何もできないからこそ、私たちには希望などありませんでした。でもそんな私たちのために、いのちであるイエス様が来てくださったのです。永遠の初めからおられるその造り主が、そのうちにいのちを持っておられるそのお方が、この地上に来てくださったのです。そしてそのようにいのちを持っておられるお方が、死んでいる罪人のためにいったい何をしてくださったのか？この方はみずからそのいのちを捨てて、そしてご自分を信じるすべての者に永遠のいのちを与えると、そう約束してくださったのです。イエス様は繰り返しこのヨハネの福音書の中でも口にされていました。ヨハネ6：47-48「：47 まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。：48 わたしはいのちのパンです。」ヨハネ11：25にもこうあります。「イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」これが私たちにとっての揺るがない希望でした。皆さん、信じられます？死んでいた、神様に逆らって歩んでいたそんな罪深い私たちのために、いのちの源であるお方がご自身を与えてくださったのです。そのみわざが成されなければ、私たちがいのちを持つことは絶対にあり得ませんでした。私たちには何もできないことを、いのちの源である方が成し遂げてくださったのです。ただ御子イエス・キリストのその大きな愛と恵みを通して、永遠のいのちが信じるすべての者に与えられるのだと約束されていました。

そうだとするとどうです？果たして私たちはこのすばらしい救いを心から喜んでいるでしょうか？私たちは確かに肉体的ないのちを神様に感謝することを喜んでできます。でも私たちはそれ以上に、イエス様を信じた者に信仰を通して与えられるその永遠のいのちを、救いというものを日々感謝しているでしょうか？肉体的ないのちが与えられていることも奇跡的なことです。でも皆さん、死んでいた私たち罪人が、今救いを得て永遠のいのちを持ち、そして新しく造り変えられた者として生きていくことができるということほど、奇跡的なものはありません。私たちが成したことはありません。いのちの源である方がすべてを成してくださったのです。イエス様はいのちであられるお方でした。それが二つ目に見てとれる主の姿だったのです。

3. イエス様は人の光 4b-5節

そして最後三つ目に見て取れる主の姿を考えてみましょう。それは、「イエス様は人の光」だということです。すべての造り主であって、またいのちの源であるお方は、やみの中で輝く光でした。ヨハネに戻っていただいて1：4の続きからこう記されています。「：4…このいのちは人の光であった。：5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」この「光」というものについて、具体的なことはまた来週詳しく考えてみたいと思います。というのも、6節から見ていくと、ヨハネはここで「光」ということばを繰り返していました。いったい「光」とは何なのかは、また来週考えましょう。でも最後に、この4、5節で注目してほしいことが一つあります。この箇所にはすばらしい約束が記されていました。5節の最後でこんなふうに言われていましたね。「やみはこれに打ち勝たなかった。」と。改めて言うまでもないかもしれませんが。私たちが今住んでいるこの世界は悲しいことに、やみにあふれています。周りを見渡してみると、私たちがテレビをつけても新聞を読んでもネットを見ても、私たちはそこにひどい悪が横行している様子を目にすることがあります。弱いものが虐げられていたり、敵意に満ち憎しみに満ちている者同士が争っているような様子を目にすることだってあります。私たち自身の手には負えません。悪が勝利しているように見える、そんな場面だってあるかもしれません。神様、どうしてですか？と疑問を抱くような場面もあるかもしれません。でもそんな時にこそ、私たちはいつも

覚えることができます。「やみは光に打ち勝たなかった。」と。やみが、光であるイエス様を打ち負かすことは、決して決してないのだということです。ひとりの註解者もこんなことばを残していました。「やみはこれに打ち勝たなかった。」ここでヨハネは完了した行動を示す動詞を使っています。闇はできる限りのことをすべて行いました。闇は策を練り、陰謀を企てましたが、ついには手立てが尽きました。どれほど闇が努力しても、光は依然として輝き続け、打ち負かされることはありません。なんと素晴らしい真理でしょう！イエス・キリストは今もなおこの暗い世界で輝いています。その光を今もなお見ることができるのです。」やみの中で輝き続けておられるその光——イエス様。この方こそがすべてにまさる勝利者でした。最後にサタンが勝ち誇ることはありません。最後に罪や死の力が勝利の笑みを浮かべることはありません。光であられるそのイエス・キリストは、十字架の死と復活を通して、すでに完全な勝利を収められたお方でした。

そして皆さん、感謝なのは、私たちはこの方にあつて、どんな時も変わらない希望を持って歩んでいくことができるというわけです。すべてにまさるその勝利者にあつて、私たちも勝利者として歩んでいくことができるというわけです。イエス様ご自身もこう言われていました。ヨハネ8：12「イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」」すごい約束が記されていました。だからこそ、改めて考えてみてください。果たして私たちはこの主の姿を覚え続けているのでしょうか？確かに私たちがこの世界を見渡してみるときに、私たちが恐れを覚えて心を騒がせてしまうような時も正直あるでしょう。でも私たちがすべてに必ず勝利されるその方を見上げる時、私たちはそこに平安と慰めを見出すことができます。たとえ私たちの目には起こっていることが理解できなかつたとしても、すべてのものをご自分の意のままに造られ、ご自分のうちにいのちを持っておられ、そして、やみに打ち勝つそのお方。そんなイエス様にすべてをゆだねて歩むことができるというわけです。そうするとどうです？皆さん、私たちはどんな喜びをもって日々を歩んでいくのでしょうか？どんなお方が私たちとともにおられるのかということを感じる時に、私たちはこの主とともに歩めることを感謝しながら歩んでいこうとしているのでしょうか？鍵は皆さん、この主の姿を覚え続けることです。決して忘れてはいけません。私たちの愛しているイエス・キリストは、私たちを愛して下さりこの地上に来てくださったイエス・キリストは、造り主であり、いのちであり、人の光でした。この主の姿を覚えながら、今週も主のためにも歩んでいきましょう。